

私は黒いけれども美しい

ベレーシート

●雅歌を、「花婿なるキリスト」と「キリストの花嫁である教会」との愛のかかわりを預言的に歌った歌として理解し、解釈したいと考えています。結婚(婚姻)という概念は、神である主が人を形造ってエデンの園に置いたことの中にすでに啓示されています。

【新改訳 2017】創世記 2 章 15 節

神である【主】は人を連れて来て、エデンの園に置き、……。

●「連れて来て……置いた」と訳されている二つの動詞のうち、最初の「連れて来た」というヘブル語は「ラーカハ」(לָקַח)で「めとる」(結婚する)という意味があります。そして後の「置いた」は「ヌーアツハ」(נָוַח)で「安息を得る」という意味です。つまり、エデンの園で神と人がともに住むことで、そこは人にとってまさに安息の家だったのです。このように、聖書は初めから神と人との結婚の書と言えるのです。御父には御子の妻となる存在を与えるという永遠の思いがあったと言えます。そのパラダイムが「夫と妻」という関係に写し出されていきます。その意味で、雅歌は「男と女、花婿と花嫁」を通して神と人との一体(「エハード」(אֶחָד)の奥義、すなわち、「顔と顔を合わせる」「パーニーム・エル・パーニーム」(אֵלֵינוּ אֵלֵינוּ)あるいは「御顔を仰ぎ見る」奥義を描こうとしています。これは愛のかかわりの究極的な表現なのです。



●前回は 1 章 2~4 節にある「花嫁の霊性」について学びました。「口づけ」に象徴される花婿のこぼれを慕い求める花嫁にそのことが表されていました。それは花婿の愛の語りかけが、この世の喜びの象徴である「ぶどう酒」よりも、はるかに勝る美しいものであることを知っているからでした。今回は 5~7 節を取り上げます。ここには花嫁のアイデンティティー(5 節)と、花嫁が置かれている不安な状況ゆえに花婿を探し出そうとする姿(6~7 節)が預言的に啓示されています。そのテキストを読んでみましょう。

【新改訳 2017】雅歌 1 章 5~7 節

- 5 エルサレムの娘たち。ケダルの天幕のように、ソロモンの幕のように、私は黒いけれども美しい。
- 6 あなたがたは私を見ないでください。私は日に焼けて、浅黒いのです。母の息子たちが私に怒りを燃やし、私を彼らのぶどう畑の番人にしたのです。でも、私は自分のぶどう畑の番はしませんでした。
- 7 私のたましいの恋い慕う方。どうか私に教えてください。どこで羊を飼っておられるのですか。昼の間は、どこでそれを休ませるのですか。なぜ、私はあなたの仲間の羊の群れの傍らで、顔覆いをつけた女のようにしていなければならないのでしょうか。

1. 「私は黒いけれども美しい」

●「私」と表記されているのは「花嫁」です。その花嫁とは「シュラムの女」(6:13)なのです。「シュラム」とは田舎者出身という意味です。事実、イエシュアの弟子たち(イスカリオテのユダを除く)はガリラヤ出身の者たちで、少なくとも彼らのうち四人は漁師であり、「無学な普通の人」(使徒 4:13)でした。やがて彼らはイエシュアの花嫁となる者たちですが、そんな花嫁が「私は黒いけれども美しい」と言っているのです。これは何を意味しているのでしょうか。

●このことばは誰に対して語っているのかと言えば、「エルサレムの娘たち」に対してです。「エルサレムの娘たち」(「ベノート・イェルーシャーライム」**בְּנוֹת יְרוּשָׁלַיִם**)とは誰のことでしょうか。娘たちと訳された「ベノート」は「バット」(**בַּת**)の複数形です。「バツィヨーン」(**בָּתּוֹן**)と言えば、「シオンの娘」を意味し、「イスラエルの民」を意味します。「エルサレムの娘たち」というフレーズは雅歌にしか使われていません(7回—1:5/2:7/3;5,10/5:8, 16/8:4)。

●ここで整理してみると、1章3節に登場する「おとめたち」とはメシア再臨前にメシアを信じる異邦の諸国の民たちです。「花嫁」とはメシアを信じるユダヤ人と異邦人の共同体としての「エックレーシア(教会)」、そして「エルサレムの娘たち」とは「いまだイエシュアをメシアとして信じていないイスラエルの民」ですが、メシア再臨前に霊の目が開かれてイエシュアをメシアと信じる「イスラエルの残りの者」でもあります。この三者は神のヴィジョンの完成のために選ばれ、メシアが地上に再臨する時に一つとなり、御国の民となるのです。

●「エルサレム」はヘブル語で「イェルーシャーライム」(**יְרוּשָׁלַיִם**)と言います。これは二つの言葉から成っています。一つは「イェルー」(**יְרוּ**)で、もう一つは「シャーレーム」(**שָׁלֵם**)です。「イェルー」の語源は「見る」という動詞「ラーアー」(**רָאָה**)の未完了形で、「主はご覧になっている」と解釈できます。二つ目の「シャーレーム」(**שָׁלֵם**)は「完成する」という意味です。この二つの言葉から、「エルサレム」は「神がご覧になっていることが完成するところ」を意味しています。そしてそこにイスラエルの民がいることを啓示しているのが、「エルサレムの娘たち」なのです。なぜ「娘たち」なのかと言えば、固有名詞の「エルサレム」が女性名詞だからです。

●5節で、花嫁はこの「エルサレムの娘たち」に対して、「私は黒いけれども美しい」と言っているのです。このことばが意味することは何でしょうか。訳文の5節は「①エルサレムの娘たち。②ケダルの天幕のように、ソロモンの幕のように、③私は黒いけれども美しい。」とありますが、原文では③ ① ②という順です。つまり原文では、花嫁が「私は黒いが美しい」ということを「エルサレムの娘たち」に向かって語っているのです。そしてこの「黒いけれども美しい」という表現は、「黒い」(「シェホラー」**שְׁחֹרָה**)が「ケダルの天幕のように」とたとえられ、「美しい」(「ナーヴァー」**נְאוּוָה**)が「ソロモンの幕のように」とたとえられています。「美しい」と訳された「ナーヴァー」(**נְאוּוָה**)は、「美しい、ふさわしい、愛らしい」とも訳されます。

●「ケダルの天幕」と「ソロモンの幕」とは**真逆(両極端)の事柄**です。「ケダル」とはイシュマエルの十二人の子どもの第二子です。彼らは遊牧民として黒いやぎの皮で天幕を作り、神に従わない異邦の民となりました。ソロモンと比べるならば貧しい者たちの代表と言えます。一方の「ソロモンの幕」は美しい糸で紡いだ幕で、幕屋で使われる幕のように見るからにきらびやかで高価な代物です。花嫁は自分のことを「黒いけれども美しい」と逆説的な表現をしているのです。

●「美しい」と訳された形容詞の「ナーヴァー」(נָוָה)、あるいは「ナーヴェ」(נָוָה)は、外面的な容姿が「麗しい、美しい、愛らしい、ふさわしい」の意味です。なぜなら、花婿が花嫁に「あなたの顔(姿)は愛らしい」、「あなたの口は愛らしい」、「あなたはエルサレムのように愛らしい」と語ってるからです。

●使徒ペテロやパウロが、クリスチャンについて以下のように逆説的な表現で記しています。しかしその真逆の間にキリストが入ることで、それらが調和するのです。

- (1)「以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、あわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。」(Iペテロ 2:10)
- (2)「すべての聖徒たちのうちで最も小さな私に、この恵み(=キリストの測り知れない富を福音として異邦人に宣べ伝えるという恵み)が与えられた・・・」(エペソ 3:8)
- (3)「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。」(IIコリント 6:10)
- (4)「私が弱いときにこそ、私は強い・・・」(IIコリント 12:10)

●こうした逆説的表現が「私は黒いけれども美しい(נָוָה)」という花嫁のことばに込められています。そしてそれを可能にしてくれているのが、花婿の「あなたは美しい(נָוָה)」ということばなのです。「ヤーファアー」(נָוָה)は内面的な美しさを意味します。このように、花嫁のアイデンティティーは花婿の愛のことばに支えられているのです。

2. 花嫁が黒いことの理由

●6節では、花嫁が「私は黒いけれども美しい」と言わざるをえなかった理由が記されています。それは花嫁が、「エルサレムの娘たち」から「黒い」と批判され、軽蔑されているからです。

6節

あなたがたは私を見ないでください。私は日に焼けて、浅黒いのです。母の息子たちが私に怒りを燃やし、私を彼らのぶどう畑の番人にしたのです。でも、私は自分のぶどう畑の番はしませんでした。

●「私は日に焼けて、浅黒いのです」という理由に、「母の息子たちが私に怒りを燃やし、私を彼らのぶどう畑の番人にした」ことを挙げています。これはどういうことでしょうか。「**母の息子たち**」とは誰のこと

でしょうか。それは「エルサレムの娘たち」(=将来メシアを受け入れる「イスラエルの残りの者」)の兄弟たちのことで、権威ある者たちです。それは「ストイケイア」といわれる宗教に支配された神殿ユダヤ教、律法学者たちのことです。怒りを燃やした彼らによって、花嫁は「黒い」ものとされてしまったのです。つまり「罪定めされた」のです。初代教会の弟子たちを見るなら、その光景が見えてきます。

●使徒の働き 3 章を思い起こしてください。使徒のペテロとヨハネが祈りのために宮に上って行ったとき、そこに「生まれつき足の不自由な人」が運ばれて来ました。この人は毎日「美しの門」と呼ばれる宮の門に置いてもらっていました。彼は宮に入ろうとしていたペテロとヨハネに施しを求めました。このことから、何が起こったのかは語るまでもありません。イエシュアが御国のことを語っただけでなく、御国が来ると何が起こるかをしるし(奇蹟)によってデモンストレーションしたように、ペテロとヨハネが「イエシュアの名によって立ち上がり、歩きなさい」と言って、彼を立たせたのです。そのようにして「生まれつき足の不自由な人」は初めてペテロとヨハネとともに宮の中に入って行ったのです。これはやがてイスラエルの残りの民が、イエシュアをメシアであると信じて、悔い改め、メシア王国に入っていくことになるという預言的なデモンストレーションでした。大勢の者がこの出来事に驚きましたが、ユダヤの指導者たちは苛立ち、ペテロとヨハネを捕らえて「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問します。そのあとで、彼らは協議して、事実は否定できないとしながらも、これ以上、このことが民の間に広がらないように、彼らを脅しておこうということになり、その上で釈放したのです。

●花嫁が「黒い」「日に焼けて、浅黒く」なってしまったのは、「母の息子たちが私に怒りを燃やし」たためであり、それゆえに、「エルサレムの娘たち」からも批判され、軽蔑されるような、冷淡な扱いを受ける存在、彼らの妬みの対象となってしまったからに他なりません。神は「母の息子たち」であるユダヤ教の指導者たちに、神の見張り番となるように求めておられていました。

【新改訳 2017】イザヤ書 62 章 6~7 節

- 6 「エルサレムよ、わたしはあなたの城壁の上に見張り番を置いた。終日終夜、彼らは、一時も黙っていはならない。思い起こしていただくこと【主】に求める者たちよ、休んではならない。
- 7 主を休ませてはならない。主がエルサレムを堅く立て、この地の誉れとするまで。」

●本来ならば、「母の息子たち」が「ぶどう畑の番人」の務めをするはずでした。しかしその務めを怠ったために、花嫁がそれをさせられる羽目になってしまったのです。「私は自分のぶどう畑の番はしませんでした」とは、無学の普通の人というべき民衆の立場ではなくなったという意味です。「ぶどう畑」とはイスラエルのことで、その「番人」とはイスラエル神のご計画が成就することを終日終夜見張る「見張り番」の務めを意味します。彼らがなすべき「ぶどう畑の番人」の務めを花嫁がすることになったので、花嫁は「日に焼けて、浅黒く」なってしまったというのです。それは罪定めされ、迫害という苦しみを受けることを意味しています。これが「私は黒い」という意味です。しかしそれは神の選びであり、神の按配であり、神の賜物と特権であり、花嫁の美しさでもあるのです。初代教会の最初の殉教者となったステパノは、ユダヤ当局によってまさに「黒い」(「シエホーラー」 $\sigma\eta\eta\omicron\upsilon\lambda\omicron\sigma$)と罪定めされた人ですが、花嫁にとっては最も美

しい花嫁だったのです。聖霊に満たされた(「ピンプレーミ」 πῖμπλημι)ステパノが殉教するさまは、イエシュアの姿とまさに瓜二つです。それゆえ、イエシュアは御座から立ち上がって、ステパノを支えています(使徒 7:55~56)。この光景は圧巻です。

3. 「黒い」ことと「切に求める」ことは同義

●花嫁が「黒い」のは宿命的なことのようにです。なぜなら、「黒い」(「シャーホール」 ἡνψ)と訳された語源の「シャーハル」(ἡνψ)は、「尋ね求める」「切に求める」という渴望用語だからです。主を切に尋ね求めることは「黒く」なることでもあるのです。つまり、ある意味において「苦しみを合わせ持つ」ことを意味するのです。ダビデは、その「黒い」経験として、サウル王の執拗な妬みによって荒野を放浪することを余儀なくされました。以下の詩篇は、この経験を歌っています。

【新改訳 2017】詩篇 63 篇 1 節

神よ あなたは私の神。私はあなたを切に求めます。

水のない 衰え果てた乾いた地で 私のたましいは あなたに渴き 私の身も あなたをあえぎ求めます。

●「切に求めます」と訳された動詞が「シャーハル」(ἡνψ)です。口語訳は「たずね求め」と訳し、新共同訳は「探し求め」と訳しています。「渴く」(「ツァーマー」 ἄμψ)と「あえぎ求める」(「カーマー」 ἡμψ)も、渴望用語の同義語と言えます。この詩篇には、ダビデの神に対する渴望が色濃く表現されています。詩篇の表題は「ダビデがユダの荒野にいたときに」となっています。ダビデがユダの荒野にいたときは、サウル王に命をねらわれて荒野を放浪していたとき、あるいはアブシャロムのクーデターのときが考えられます。いずれにしても、ダビデのすごさはそうした暗闇のときにこそ、神との絆が一層深められる機会としたことです。これはキリストの花嫁である私たちにとっても大きな励ましです。花婿を慕い求める者には、必ず「黒い」とされる「苦しみの経験」が伴うということです。しかしそのときこそが、神とのかかわりの絆がより一層強められる機会となるのです。

●宗教指導者たちによって脅されたペテロとヨハネが釈放されたあとに、仲間のところに行って、祭司長や長老たちが言ったことを残らず報告しました。これを聞いた主にある者たちはどうしたでしょうか。彼らは心をつにして、神に向かって声を上げます。「あなたのみことばを大胆に語らせてください」と。すると集まっていた場所が揺れ動いて、一同は聖霊に満たされて(力としての外からの満たしである「ピンプレーミ」 πῖμπλημι)、神のことばを大胆に語り出したとあります。このように、「黒く」罪定めされた花嫁は、花婿をより「切に求める」契機とされるというのが花嫁の霊性なのです。私たちはそのような花嫁となっているのでしょうか。「黒い」と非難されるということは、キリスト馬鹿になっていることの上です。「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです」と大胆に宣言することです。もしキリストの花嫁が脅しに対して恐れを抱いてしまったとしたら、キリストの花嫁になることはできませんし、携拳される保証はありません。携拳されずに、信仰のやり直しということになるでしょう。それほどに花嫁の献身の愛は一途な

のです。「シャーハル」(𐤑𐤏𐤔)は「真面目に、熱心に、本気で神を求め、神を捜し求めること」を意味します。ですから、箴言 8 章 17 節には「わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを熱心に捜す(𐤑𐤏𐤔)者は、わたしを見出す」とあります。

4. 花婿の居場所を捜そうとする花嫁

7 節

私のたましいの恋い慕う方。どうか私に教えてください。どこで羊を飼っておられるのですか。昼の間は、どこでそれを休ませるのですか。なぜ、私はあなたの仲間の羊の群れの傍らで、顔覆いをつけた女のようにしていなければならないのでしょうか。

●7 節からこれまでの流れとは少し変化しています。花嫁は矢継ぎ早に花婿に問いかけています。花婿に問いかけているように見えますが、実は自分のたましいに問いかけているのです。ここで初めて、花嫁が花婿を「私のたましいの恋い慕う方」(「シェアーハヴァー・ナフシー」𐤑𐤔𐤏𐤕𐤏𐤔𐤓𐤔)と呼んで、花婿の居場所を捜そうとしています。冒頭の「シェ」(𐤑)は関係代名詞「アシエル」(𐤑𐤔𐤏)の省略した形で、意味は「～するところの方」です。「たましい」と訳される「ネフェシュ」(𐤏𐤓𐤕)の語源は「喉」を意味します。そこからあらゆる欲望の座として用いられます。喉は渴きを感じる場所です。ですからこの箇所を「私のたましいの熱愛する人」とも訳すことが出来ます。

●「私のたましいの恋い慕う方」という表現は雅歌で 5 回使われています(1:7/3:1,2,3,4)。この表現がなされるときには、必ず花嫁は花婿を捜し求めています。他のときには、花婿のことを「私の愛する方」(「ドディー」𐤏𐤓𐤕)と表現しています。花嫁は花婿が自分のことを「あなたは美しい」と言ってくれていることを知っているのですが、自分を支えてくれている花婿がどこにいるのかがわからないのです。居ることは分かっている、どこに居るのかがわからない。花嫁はその不安をたましいで知ろうとしているのです。恋い慕う方のことを私は十分に知ってはいないのではという不安を感じながら、恋い慕う方の居場所を捜しているのです。

●「たましい」は、恋い慕う方の居場所が分かることでかなり安心するものです。しかし逆に居場所が分からないと不安を感じてしまう厄介なものです。花嫁の知性と感情が揺れ動きながら、花婿の居場所を捜そうとしているのです。

(1)「どこで羊を飼っておられるのですか。」

(2)「昼の間は、どこでそれを休ませるのですか。」

(3)「なぜ、私はあなたの仲間の羊の群れの傍らで、顔覆いをつけた女のようにしていなければならないのでしょうか。」

●花嫁は花婿が羊飼いであることは知っています。しかしどこで羊を飼っているのかを知りません。また中東では「昼の間」は暑さのために羊を休ませなければならないことを知っていますが、その場所がどこ

なのかが分からないのです。そして花婿の仲間の羊の群れに出会うことができたとしても、その傍らで、自分が部外者であるかのように、「なぜ顔覆いをつけた女のようにしていなければならないのか」という感情的な戸惑いさえも感じています。「顔覆いをつけた女のように」の部分フランス語訳は「ベールで顔を覆った女のように」と訳していますが、岩波訳は「さまよい歩く者のように」と訳しています。こうした表現は、肝心の花婿の居場所が分からないという焦りと不安のゆえに、まるで遊女のようにベールで顔を隠しているような女になることがないように願っているのです。

●創世記 38 章ではユダの息子の嫁タマルが、ユダを欺いて近づきました。彼女がベールをかぶり、顔を覆っていたために、ユダは遊女だと思って彼女のところに入り、タマルは身ごもるという出来事が起こります。彼女は双子を産みますが、割り込んで先に生まれて来たペレツがイエシュアの祖先となりました。一見、ユダが犯した罪であるにもかかわらず、こうして神のご計画が進められて行くのです。とすれば、花婿の居場所をたましいで捜そうとすることのなかにも、神の配剤はあるともいえるのです。

●愛する者の居場所が分からないときの気持ちを想像してみてください。そういうときに、ある種の隔たりを感じさせられるものです。いい加減なかかわりを持っている者にはそのような不安や相手との隔たりを感じることはないのですが、花婿のことを切に慕う者にとっては、居場所を知らないことが一抹の不安を抱かせるのです。ところで私たちにとって花婿キリストはどこにいらっしゃるのでしょうか。たましいで考えるなら不在経験を余儀なくされます。しかし霊の中で生きるなら、より深い神の臨在の経験をもたられるのです。たましいの不在経験を通して花嫁は霊の中で生きることを学び、花婿との関係はゆるぎないものとなっていきます。

5. ゆるぎない信頼を築く不在経験

(1) だれもが通る道

●詩篇には嘆きの詩篇と呼ばれる詩篇があります。そうした詩篇には主の臨在と不在(神が遠くにおられる感じがして、祈っても答えられないという不在感)が交錯しています。神が遠くに感じられる時、問題は必ずしも私たちにあるのではないのです。これはクリスチャンであるならば、誰もが通る道です。それは痛みと動揺を伴いますが、信仰の成長のためにはどうしても欠かせないものなのです。神が遠く感じられるとき、神が怒っておられるに違いないとか、あの罪のことで懲らしめを受けているのではないかと思ったりします。神に見捨てられ、神に拒絶されたと感じるのは、往々にして私たちの罪とは関係のないものです。それはむしろ信仰のテストです。神の臨在が感じられず、神が自分の人生に働いておられるという明確な感情を見出せない時でも、神を愛し、神に信頼し、神に従い、そして神を礼拝することができていくための神の訓練なのです。

(2) 神の不在経験の意義

① 感情的体験から信頼する関係へ

●クリスチャンが犯す最も典型的な間違いは、神ご自身を求めることよりも、何らかの〈体験〉を求めることです。ある種の感情的な体験を求めることは間違いです。神は私たちのたましいにある感情を取り除いて、私たちが感情に依存しないようにされます。信仰が成長するにつれて、感情的な高まりの依存的状態から、信仰的自立へ向けて私たちを乳離れさせるのです。神は、私たちが〈感じる〉ことよりも、〈信じる〉ことに関心をもっておられます。神を喜ばせるものは感情ではなく、信仰なのです。それは私たちの中にある霊の中で起こる事柄です。私たちが信仰において最も成長できるのは、神などどこにおられるか分からないというような時なのです。旧約のヨブはそのようなところを通させられた人でした。ヨブは一日にしてすべてを失ってしまった人です。家族も、仕事も、そして持ち物すべてです。しかも最も落胆させられたことは、37章にもわたって神が何も語ってくださらないことでした。

② 不在経験は神の臨在を感謝するため

●神はある意図をもって、私たちからご自身を隠されることがあります。これは雅歌の中でも繰り返されます。神の不在経験の意義は、私たちの幻想を打ち砕いて、神に対するさらに深い信仰へと導くことにあります。エマオ村の二人の弟子たちのように落胆したり、落ち込んだりしてしまうのではなく、むしろ自分自身のたましいの幻想から解放させるためです。そのためには私たちが霊を活用して、霊の中で生きることを学ばなければなりません。なぜなら神はいつもそこから人の新創造をはじめられるからです。

③ 不在経験は神に対する新しい視点をもたらす

●神の不在を個人的に経験することで、私たちは神の臨在をより深く、そして新しい視点で受けとめ、神に感謝できる場所へと導かれるのですが、それは私たちが霊の中に生きることによってです。花嫁はそのことを学ぶ必要があるのです。ここに神の不在経験の意義があります。私たちが気づかなくても、理解できていなくても、神は私たちの霊というど真ん中におられて、私たちにいつも絶えず深くかかわっておられるのです。心が燃えているときも、あるいは心が燃えていないときでも、主は私たちの霊の中にいて親しくかかわっておられるのです。そのことに気づかされるのが神のみわざであり、神のいのち(かかわり)に触れることなのです。いのちにおける神のみわざは、「なぜこれが私の身に起こっているのか」ではなく、たとえそうした状況にあったとしても、神は常に私たちの霊の中におられるのだということを私たちに悟らせるためのものです。

ベアハリート

●「私は黒いけれども美しい」と語る花嫁の霊性を学ぶとともに、「自分のたましいの恋慕う方」の居場所を捜す花嫁が、常にその方が花嫁自身の内に臨在しておられることを気づかせるために、神はあえて不在経験を通させるということを心に秘めおきたいと思います。

三一の神は私たちの霊とともにあります。

2022/11/27